

## 荷兮編『曠野』の序の表記特性

岡田 桂子

## 一、はじめに

元禄二年三月、松尾芭蕉は山本荷兮に与えるべく、『曠野』の序文を執筆する。それは現在個人蔵の形で残っており、芭蕉全図譜166番で見ることができる。

この文面と『曠野』に掲載された序文とを比較すると、幾分の表現表記の相違が見いだされる。そのうち大部分を占める表記の相違は主に、漢字と仮名の書き換えと仮名字母の置き換えの相違である。芭蕉の序は『曠野』掲載に当たって、山本荷兮の手で修正されたことになるが、では何故荷兮は芭蕉の序文を修正したのか。

この問いを解くにあたり、先ず、芭蕉自筆の序文の内容を検討し、次にその序文を荷兮編『曠野』の序文と、仮名字母まで含めて詳細に比較する。その際、その周辺資料、すなわち乙州本『笈の小文』、かげろふの歌仙卷子、葛城の句文懐紙、の表現表記と比較する。それによって、シンプルで洗練された芭蕉の用字法や、文脈の要所を強調表示することで、読者の注意を喚起する修辭的な表現法が、荷兮の序文から脱落していく次第を明らかにすることができるからである。

## 二、『曠野』の序文

先ず、序文の全文を挙げる。

## 真跡『曠野』の序文

## あら野の序

尾陽蓬左、樗木堂主人荷兮子、集を編て名をあらのとていふ。何故に此名ある事をしらす。予はるかにおもひやるにひととせ此郷にたひ寝せし折ぐの云捨集て冬の日といふ。その日かけ相つゝきて春の日又よにかゝやかす。けにや衣更着、やよひの空のけしき、柳桜の錦をあらそひてふとりのをのかさまぐる風情につきて、いさゝか実をそこなふものもあればにや。いとゆふのいとかすかなる心のはしのあるかなきかにたとりて姫ゆりのなにもつかす雲雀の天空にはなれて無景のきへまりなき道芝のみちしるへせんと此野のはらの野守とはなれるへし

元禄二年 芭蕉翁桃青

## 荷兮編『曠野』の序文

尾陽蓬左、樗木堂主人荷兮子、集を編て名をあらのとていふ。何故に此名有事をしらす。予はるかにおもひやるにひととせ此郷に旅寝せしおり《の云捨あつて冬の日といふ。其日かけ相續て春の日また世にかゝやかす。けにや衣更着、やよひの空のけしき、柳桜の錦を争ひてふ鳥のをのかさまぐる風情につきて、いさゝか実をそこなふものもあればにや。いといふのいとかすかなる心のはしの有かなきかにたとりて姫ゆりのなにもつかす雲雀の天空にはなれて無景のきへまりなき道芝のみちしるへせんと此野のはらの野守とはなれるへし

元禄二年弥生 芭蕉桃青

『曠野』は全三冊、上、下、員外から構成されている。上、下は発句集、員外は連句集。発句七百三十五句、歌仙九巻、半歌仙一巻を収める規模の大きな句集である。芭蕉は、奥の細道の旅を控えた元禄二年三月、荷兮刊行予定の『曠野』に与えるべく、杉風の別墅より序文を草している。

編者は、山本荷兮。別号、樗木堂。職業、医師。当時四十二才。名古屋の桑名町に住む。医師の傍ら、宗

因流の俳諧をたしなむ。貞享元年（三十七歳）『冬の日』を編集し、『春の日』『曠野』と矢継ぎ早に撰集を出すに及んで、牢固たる地盤を築き、尾張蕉門の頭梁となった。（俳諧大辞典 明治書院蔵版）。

この序について高橋庄次氏は、芭蕉の言葉にある由序、来序、内序という序の三体（『三冊子』（白））の構造を持ち、西行歌の世界と、莊子の「無窮に遊ぶ」世界を一つに重ね合わせた、〈かるみの位〉の新風樹立の宣言であった、と指摘されている。（注一）また、乾裕幸氏は、芭蕉は序の中で『冬の日』『春の日』の「いささか実をそこなふもの」に対する反省を契機として『曠野』が成ったことを告げており、それは荷兮を評価したものである、（注二）という。『あら野』の序が、俳諧の新しい境地を示し、荷兮に「みちしるへせんと此野のはらの野守とはなれるへし」（俳諧の野の道しるべをしようとの『あら野』の編者になったのであろう）と、その役割を期待した内容であることは確かである。が、「いとゆうの」以降、新しい俳諧の境地を述べ、編者を野守（野の番人）に例えるとき、人に先んじて「あら野」に住む、荷兮の人物が言い表されている。荷兮に対し全面的信頼を寄せていたとは言い難い雰囲気を感じられる。（詳しくは後述する）一方、「旅を栖」とする芭蕉にとって、信頼を寄せ得る相手は「何某ちりと云けるは此たびみちのたすけとなりて、万いたはり心を尽くし侍る」（『野ざらし紀行』）「ともに旅ねの哀をも見、且ハ我為に童子となりて道の便ともならんと」（『笈の小文』）「曾良は・・・芭蕉の下葉に軒をならべて、予が薪水の労をたすく」（『奥の細道』）と旅の苦楽を共にする人物であった。数年後、蕉門から離れていった荷兮であるが、この時期の芭蕉が荷兮に対して、どのような評価をしていたかは明らかではない。もし序文の内容にそのような雰囲気があるとするれば、芭蕉はこの時期すでに、荷兮に対して僅かながら、違和感を感じていたことになる。本章では、「いとゆうの」以降の内容について吟味し、「野守」としての荷兮への期待がどのようなものであったのかを考察したい。

「いとゆう」とは、日本国語大辞典（小学館刊）によれば「晩秋の空にクモの糸のように細い物が飛ぶ現象。転じて、春、晴れた日に、地面からゆらゆらと立ち上る気。はかないもの、あるかなきかのもの、薄い物などの譬として使われる事が多い」とある。

芭蕉の用例は元禄二年春、『おくのほそ道』の旅で詠まれたものがある。

室八島

糸遊に結つきたるけふりかな（『曾良書留』）

入かゝる日も糸ゆふの名残かな（『雪まろげ』）

陽炎は地よりのぼるものをいい、糸遊は空にちらつくものをいうという説がある。（注三）宙にあって、それと分かぬまに消えて行くはかないものである。

「たどりて」は「行くべき道を迷いながら探す。また、迷って行き悩むこと。次から次へと筋道に添って深く考える。考えを深く及ぼしていくこと」（日本国語大辞典）である。

芭蕉の用例は、

（付句）月野をたどる道行の感（蕨虫庵小集）

ちかくへそろ／＼とどり可申かとも存候（牧童宛書簡）

九折重りて雲路にたどる心地せらる（『更級紀行』）

かの画図にまかせてたどり行けば（『おくのほそ道』）

等、紀行文に多く使われている。

「いという」「いとかなる」「心のはし」「あるかなきか」と、幽かな物や様を表す言葉が綴られていく。そして、それらを「たどりて」一おぼつかない足取りで迷いながら探す一というのである。

「姫百合の何にもつかず」は、『山家集』の「雲雀たつあら野におふる姫ゆりの何につくともなき心かな」をふまえる。渡部保著『西行山家集全注解』（風間書房 昭和四十六年刊）によれば、「ひめゆりのゆりにゆりうごく意を懸けている。雲雀の空高く飛び立つ荒野に生えている姫百合のように何によりつくともなく不安定になよやかな心であるよ」という。また、芭蕉、曾良らの歌仙（於嘯山旅店興業 元禄二年二月七日）に

たかよめと身をやませむ物おもひ 芭蕉

あら野の百合に泪かけつゝ 嵐蘭

とある。誰に身をまかせようかと思ひ悩む前句の娘の姿に「何につくともなき」あら野の百合を連想したものである。序に言う姫百合も、頼るべき物のない不安な、おぼつかない様を表したものと解釈できる。荒野をただ一人、あるかなきかの幽かな風情を訪ねて、おぼつかない足取りで歩む老俳諧者のイメージは、並外れて繊細な感性と孤独な忍耐を養わなければならないことを示唆している。と同時に、若い娘を連想させる（注四）姫百合に例えるなど滑稽味も感じられる。

「雲雀の大空にはなれて」から、一転して雄大な心地を表す。

「はなれて」とは、「閉ざされたり固定されたりした状態から解放される。捕らえられたりつながれたりしている動物などが自由に逃げ出す」（日本国語大辞典）ことである。果てしない野を自由に飛翔する雲雀の境地を表している。

貞享四年の『続虚栗』に雲雀を詠んだ連作がある。

草庵を訪ひける比  
永き日も囀たらぬひばり哉  
原中や物にもつかず鳴雲雀

ここでは、作者は何にもとらわれず囀り、舞う雲雀の自由な心を感じながらも、傍観者の立場で見ている。一方、『笈の小文』（乙州本）にも雲雀を詠んだ句がある。

三輪 多武峯

隣峠

多武峯ヨリ龍門へ越

道ナリ

雲雀より空にやすらふ峠哉

「雲雀より空にやすらふ」（私は今、雲雀よりも高く空に休らっている）と「やすらふ峠哉」（この峠で休らっている）と両方の意味がある。「雲雀より空にやすらふ」と言うとき、「ああ、自分はいま雲雀より上に休んでいるのだ。何か天界にでもいるような気持ちだ」（注五）というのである。人間の俗世界から遠く隔たった心境になっている。序に言う雲雀もまた、このような境地を表したものとえよう。雲雀のように、大空から眺めれば、野を行く道の果てしなさが、見て取れる。また、姫百合の鮮やかな色彩もよくわかる。実際に山の頂上に立ってみなければ、このような心持ちを実感するのは容易なことではない。

そして、「無景のきほまりなき道芝のみちしるべせむ」と言うとき「道芝」「みちしるべ」と「道」を重ねた言葉から、あくまで道しるべせんとする野守の姿が自然に連想される。

「道芝」は「道端に生えている芝草。道の案内をする者」（日本国語大辞典）である。芭蕉の用例にはしどけなく道芝にやすらひて

どむみりとあふちや雨の花曇

（元禄七年 芭蕉翁行状記）

の一例のみ。

謡曲には「都へはとても帰らぬ道芝の雑兵の手にかからんより」（清盛 謡曲二百五十番集）、「松のこなたの道芝を誰踏みならし通らん」（鶯）、「終に行くべき道芝の露の命の限りをば」（綾鼓）、他「道芝の露」とするものが、八例あり、つまらない物、はかない物のシンボルとして使われている。

「道しるべ」は、「道案内。道の方向など教えるために先導する人」（日本国語大辞典）である。「道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて、越ゆべきよし」（『おくのほそ道』）、「此道にさぐりあして、新古ふた道にふまようといへども、みちしるべする人しなればと」（『おくのほそ道』）の用例がある。「道芝」は「きほまりなき道芝」と「道芝のみちしるべせむ」の両方にかかる。つまり、「（荷が）果てしなく続く道の道案内をしよう」と言いつつ、「芝草が道案内になって導いてくれようとする」と旅の面白さを語る意味も含まれている。このようなレトリックが芭蕉の句にしばしば見られることが指摘されている。（注六）。

このように見てくると、俳諧の新風を樹立することもまた、人跡まれな荒野を踏み迷う「旅」である、と宣言していることがわかる。「ちり」や「社国」「曾良」が同行したような実際の旅ではないとはいえ、「いというの」以降、謡曲的な語り口で、あら野の旅のエッセンスとも言うべきものが述べられている。

このような文脈の中で、荷が「野守」に例えられている。すなわち、俳諧の野にいちちやく住み着き、道に精通した野守である、と。

「野守」とは日本国語大辞典によれば「立ち入りを禁じられている野原の見張りをする人。農夫」である。芭蕉の用例は

ぬす人と三笠の春や呼ふらん  
火付けの野守とらへられけり

似春

桃青

（延宝七年 須广ぞ秋百韻）

の一例のみ。

謡曲「野守」では、野守の老人が、前シテ。後シテは鬼神となり、野守の鏡で諸国を巡る山伏に、地獄の阿鼻の有様まで写してみせる。

序に言う「野守」は荷が野守の老人に見立てた面白い趣向であり、「俳諧の野」を守る重要な役割が期待されている。が一方、「野守」は見張り番をするのが主要な役目であり、旅立たぬ者である。「野守とはなれるべし」の係助詞「は」は野守を取り立て、強調する。したがって、ここは「道案内をつとめるべく、野守となってしまった」というふうに解せるのである。

勿論、あからさまな非難の意のみを嗅ぎ取るには適当ではない。しかし、少なくとも芭蕉自身に寄り添う同行者とは見なしていなかったということは言えるのではないだろうか。

## 三 表現と表記の異同

従来テキストの表記上の変更は、ほとんど無視されてきた。が、荷兮は芭蕉から与えられた序文を刊行すべく清書する際、主に表記（漢字と仮名のとの書き替えと仮名字母相互の交換）について多く書き替えるのである。一般的に言って、漢字は表意文字であり、言葉の実体やイメージを瞬時に視覚的に捉えるのを容易にし、伝達の正確さがより期待できる。一方、曖昧さを許さず、表現の自由さが限定される面もある。これに対し、仮名表記は、表音文字であり、一字一字の結合をもって一語を表す。読み手は先ず音をたどり、それから実体を認識するのである。その際、同音に複数の意味を込め、聴覚に訴えて、意味の転換を容易にする。仮名書きの中に漢字が混じると漢字が目立つ結果となる。

最近の研究では『野ざらし紀行』泊船本に、版本としての特性として、誤読を避け、読み易さを追求したと同時に、表現の平板を避けるべく細やかに配慮された用字法があること。また表記をもって、述懐する主人公の氣息を表象したと考えられるものがあること、などが指摘されている。（注七）

本章では、主に漢字と仮名表記について比較し、荷兮の書き替えの実体がどのようなものであったのかを考察したい。

まず、表現の相違をまとめると次のようになる。

表一 表現の相違

	真跡懷紙	荷兮編『曠野』の序
1	あら野ゝ序	
2	元禄二年 芭蕉翁桃青	元禄二年弥生芭蕉 桃青

表現についての相違は、題、年月日、署名、に見られるだけで、地文にはほとんどない。

荷兮編『曠野』では「弥生」をつけ加え、真跡に書かれた「翁」が荷兮編『曠野』では省かれている。どちらも、荷兮が著者、年月日をより正確に表示し、読者により明瞭に伝達しようとした心がけた結果であると考えられる。

一方、表記の相違をまとめると次のようになる。

## (二) 表記の相違

表二 真跡と荷兮編の漢字と仮名の表記の相違

	真跡	荷兮編
1	樞木堂	樞木堂
2	*比名ある事を	比名有事を
3	*一とせ	ひととせ
4	*たび蔭せし	旅蔭せし
5	*折《の	おり《の
6	*集めて	あつめて
7	*その日かけ	其日かけ
8	*相つゝきて	相続て
9	*又	また
10	*よに	世に
11	*あらそひ	争ひ
12	*てふとり	てふ鳥
13	いとゆふ	いといふ
14	*あるかなさか	有かなさか
15	*何にもつかず	なにゝにも つかず
16	道しるへせん	道しるへせむ

1, は漢字表記の、13, 16, は仮名表記の相違である。＊は漢字と仮名表記の相違であり十六例中十三例を占める。漢字表記は荷兮の方が三例多い。

先ず、漢字と仮名の書き替え以外の相違について見る。「櫻」と「櫻」について、「櫻」は国字であり、正式には「櫻」の方である。荷兮自身の号であり、正確に記そうとする意図が感じられる。

助動詞「む」について、「ん」と「む」の相違が一例ある。真跡類及び乙州本では、助動詞「む」二十五例中、「ん」十九例、「む」六例である。

「いとゆふ」と「いといふ」について。漢字表記は「糸遊」である。「遊」の読み方は「ユウ」であるが、歴史的仮名遣いは「いう」である。「ユウ」という発音の表記を正確に記そうとしたのであろう。

漢字と仮名の書き替えについて、用例を検討すると次のようになる。

表三一 ア 漢字を仮名へ書き替えたもの

	真跡 漢字	荷兮 仮名
1	一とせ	ひととせ
2	折《の	おり《の
3	又	また
4	何にも	なに
5	集て	あつめて

表三一イ 仮名を漢字に書き替えたもの

	真跡 仮名	荷兮 漢字
6	ある事	有事
7	たび寐	旅寐
8	その日かけ	其日かけ
9	相つゝきて	相續きて
10	よに	世に
11	あらそひ	争ひ
12	てふとり	てふ鳥
13	あるかなきか	有かなきか

表一ア、イ は、同じ言葉を漢字と仮名で表記したの語についてまとめたものである。何故、漢字或いは仮名で書かれねばならなかったのか、この時期芭蕉がどちらの表記を多く採っていたかを見るため、同時代に書かれた真跡、「なをみたし」句文懐紙三本（芭蕉全図譜137番、138番、139番）、かげろう歌仙巻子（芭蕉全図譜161番）及び乙州本『笈の小文』を参照し用例を検討する。（注ハ）

※以下、芭蕉全図譜137番、138番、139番をそれぞれ、N1、N2、N3 芭蕉全図譜161番をK1 乙州本『笈の小文』を乙州本とする。それらを総称するときは、「真跡類及び乙州本」とする。

- (1) 真跡類及び乙州本の「一」の表記  
「一」11例 （鷹一つみつけてうれし、一つぬいて後ろにおひぬ、消え行方や鳴一ツ、あるハー折 なく、梅一木もなし、梅一もとも、只此一筋につなかる、只一日のねかひ、他）  
「ひとつ」2例 （旅のひとつ）  
「老」1例 （かみこぢつ）
- (2) 真跡類及び乙州本の「折」の表記  
「折」1例 （あはれなる折ふし）
- (3) 真跡類及び乙州本の「又」の表記  
「又」4例 （人又亡聴せよ、又是旅のひとつ、又山茶花を宿、又後ろの方に山を）
- (4) 真跡類及び乙州本の「何」の表記  
「何」2例 （かしこに何と云川、何わさすともみえず）
- (5) 真跡類及び乙州本の「集」の表記  
「集」1例 （三月の糧を集に）
- (6) (13) 真跡類及び乙州本の「ある」の表記  
「ある」2例 （ゆへある人の首途する、わつかに風雅ある人に）  
「有」3例 （老里斗も有へし、箱根こす人も有らし、いかに故有事にや）
- (7) 真跡類及び乙州本の「たび」の表記  
「たび」例ナシ  
「旅寝」2例 （旅寝してみしや、ともに旅寝のあはれを）  
「旅」4例 （旅のつと、又是旅のひとつなり、旅の具多きハ、語るも旅のひとつなり）  
「旅人」1例 （旅人と我名よはれん）
- (8) 真跡類及び乙州本の「その」の表記  
「其」8例 （其貫道する物は、其日は雨降、其所《の風景、其夜吉田に、其代のみたれ、

其代の名残、其時のさはき、其糟粕を改る事)

- (9) つゞきて  
真跡類及び乙州本に例なし
- (10) 真跡類及び乙州本の「よ」  
「世」1例(世にいらこ白といふ)
- (11) あらそひ  
真跡類及び乙州本に例なし
- (12) とり  
真跡類及び乙州本に例なし

相違十三例の内、真跡類及び乙州本に用例が複数有り、当時の用例と比較できるものは、「一」「又」「何」「ある」「たび」「その」である。

この六例の内、当時漢字表記を多くとっていたにもかかわらず、芭蕉がその序文で、わざわざ仮名表記にした語は、「その」「ある」「たび」である。

「その」は「その日かけ」と続き、「日」の方が目立つようにしたためだろう。荷兮のように「其日かけ」としたのは「其日」と続き、日を指示する語に取られかねない。

「有」は、「此名有事」などと送り仮名をふらず漢字が続くと漢文風になる。

「あるかなきか」は、「ある」と「なき」が一对であり、仮名書きにした方が、存在が認められないほどかすかな様にふさわしい。

「たび」は芭蕉が仮名書きにするのは珍しいケースである。「旅寝」という訓漢字の熟語を「たび寐」と一部仮名書きにし、読み誤りを避ける配慮をしている。がそれだけではなく何らかの特別な表記意識に基づくのではないか。「寐」が漢字であるため、「たび」よりも「寐」に重心がかかり、此の郷に逗留した事実を強く示そうとしたのではないかと考える。

逆に、当時芭蕉がおおむね漢字で表わし、序文でも同様であったが、荷兮がその表記を変更した語は「ひととせ」「なに」「また」である。これらの語を仮名書きにするのが、荷兮独自の表記であった、特に「ひととせ」は、「ひと」に珍しい字母「悲」を使用しており、この語が目立つ結果となっている。荷兮編『曠野』の本文においても、「ひとつ脱いで」の「ひと」に同じ字母を当てている。「一」という簡便な文字よりも、華やかな字形の文字を選択する荷兮の表記意識が伺える。

「ひととせ」には①一年、と②ある年、という意味があるが序文では②ある年、の意味で用いられている。荷兮は、一年と取られることを避けようと仮名書きに改めたのではないだろうか。

「なに」について。「何」は「なん」と読む可能性もあり、荷兮にも読み誤りを避ける配慮が見える。

「また」について。荷兮編『曠野』では行末に位置しており、行を整えるために仮名に書き替えたのかも示れない。

乙州本及び真跡類に用例が少ないため、それぞれのテキストの中で、漢字書き、仮名書きの理由を考察せざるを得ない語は「集めて」「折《の》」「よに」「あらそひ」「相つゞきて」「てふとり」の六例である。特に「あらそひ」「相つゞきて」「てふとり」は、用例が無く、これらの言葉自体、芭蕉の語彙の中では、珍しいものである。

「よに」は、仮名書きにすることで意味にあいまいさが生まれている、と考えられる語である。漢字で書くとし、「世の中に」という意味に限定される。

「あらそひ」は「錦をあらそひ」であるから「はりあう、きそう、競合する」の意であるが、漢字であると「いさかい」の意が強く出る。これらは、観念的、比喩的な言葉でもある。

「つゞきて」もその主語は「日かけ」であり、観念的、比喩的な言葉である。「相」のあと、漢字が二文字続いて「相続」となるのを避ける配慮もあった。

「てふとり」も詩歌の題材としてのもので、実際の「蝶」や「鳥」を指すわけではない。

これらの語に対して「集て」は、真跡の方が漢字、荷兮の方が仮名書きの動詞である。「物や人をつにまとめる」意であり、意志を持って行う実際の荷兮の動作を表している。「折くの」も集を編む荷兮の動作に関わる語である。漢字と仮名の表記の考察から次のことが推測できる。要するに、芭蕉は仮名書きを多くする事で漢文臭を避け、文字の前後に気を配り、漢字を目立たせるために効果的に使っている。動詞、名詞の中で、観念的、比喩的な物には仮名書きで、そうではない詞は、漢字で表記する傾向がある。

一方荷兮はこのような表記意識が働いている事に無頓着であり、動詞や名詞を漢字化して言葉の持つ「含み」を失わせる結果となった。また、「有」「其」を漢字化して、漢文風の雰囲気を出そうとした。一般の

規範に従った表記を心がけており、荷兮なりに正確な表意を目指したのであろう。

すなわち、荷兮は芭蕉の序文を大胆に書き直そうとしたのではなかった。それは、読者に明瞭に伝えるための微調整のつもりであった。そのためには、師とする芭蕉の文でも必要とあれば、直すという荷兮の態度が見える。もしそうなら芭蕉の文章はその意図を伝えるのに未完と見ていたことになる。少なくとも荷兮はそうみなして筆を執ったことになる。

#### 四 単語を目立たせる仮名字母

荷兮が清書する際に、もっとも多く変更を加えた分野がある。それは使用する仮名字母の変更である。先行研究において、芭蕉の二種類の仮名字母の使い方が確認されている。一つは汎用字母として頻繁に用いられる文字で、それらの使用率はおおむね85%を越えている。一方、行頭、行末、行頭、行末、同じ文字を繰り返す場合紙面に変化をつけるため、また単語を目立たせるために装飾的に用いられる字母がある。これらの使用率はおおむね15%以下である。(注七)それは見た目には、地味な文字、派手な文字というふうに表示される。概して云うと、少数用いられる字母の方が画数が多く見た目が派手な場合が多い。芭蕉のテキストには、このような装飾文字を使用する事で、文章の要所を強調表示しようとする表記意識があることが、報告されている。

以下、それらの説を要約する。

①『野ざらし紀行』天理本から画巻本の推敲過程で、書きやすく読みやすい字母を選んで集中利用し、汎用字母としている。汎用字母の性格を失った各字母は用途が限定され、行頭・行末・文節・語頭・語尾・活用形を表示する文字として特殊化した。これらの字母の中には、語り手の陳述を強調表示するため、装飾文字として助詞・助動詞に採用されているものがある。(注十)

②『野ざらし紀行』天理本中で少数用いられる字母には、修辭的な特性のみでは、その使い分けの意図を十分に説明できない字母と、単語を目立たせる意図があると思われる字母とがある。それらは、語彙に起因する選字意識はほとんど認められないが、強調されるにふさわしい場面では、装飾文字の使用頻度が高い。主人公の心理のありかをマークする字母用法となっている。(注十一)

本稿では、これらの意見、見解をふまえ、「あら野の序」のなかで装飾字母がどのように使用されているのかを検討し、芭蕉の表記意識を考察する。また、その上で荷兮の清書の実体がどのようなものであったかを明らかにしたい。

先ず、それぞれの序に使用されている字母を仮名ごとに整理してみる

表四 真跡序の字母用例数

仮名	主要字母	
あ	安 6例	
か	可 11例	
き	幾 6例	
け	介 2例33%	計 2例67%
し	之 4例67%	志 2例33%
す	寸 4例	
せ	世 3例	
た	多 1例50%	堂 1例50%
て	天 6例86%	亭 1例14%
と	止 6例67%	登 3例33%
な	奈 7例	
に	尔 7例64%	仁 3例27% 耳 1例9%
の	乃 20例	
は	者 5例71%	盤 1例14% ハ 1例14%
ひ	比 4例	
へ	部 2例	
ま	末 2例	

み	美	1例	
も	毛	4例	
り	利	3例75%	梨1例25%
れ	礼	2例67%	連1例33%
を	遠	6例	
ん	无	1例	

表五 荷分の字母用例数

仮	主要字母	
あ	安	2例67% 阿1例33%
か	可	10例91% 加1例9%
き	幾	3例60% 支1例20% 起1例20%
け	介	2例67% 希1例33%
し	之	4例67% 志2例33%
す	須	2例50% 寸1例25% 寿1例25%
せ	世	2例67% 勢1例33%
た	多	2例
て	天	6例86% 亭1例14%
と	止	6例86% 登1例14%
な	奈	6例75% 那2例25%
に	尔	7例64% 仁3例27% 耳1例9%
の	能	10例53% 乃7例37% 農2例11%
は	者	4例67% 盤1例17% ハ1例17%
ひ	比	2例50% 日1例25% 悲1例25%
へ	部	1例 遍1例50%
ま	末	2例67% 満1例33%
み	ミ	1例
も	毛	3例75% 母1例25%
り	里	4例
れ	礼	3例
を	遠	4例 越2例33%
ん	*	***

※「い、う、え、お、く、こ、さ、そ、ち、つ、ぬ、ね、ふ、ほ、む、め、ら、る、ろ、わ」の二十文字については同じ一種類の字母を使用している。

この表から容易に見て取れるのは、真蹟は使用する仮名字母の種類が少なく、荷分はより多くの字母を使用していることである。

(1) 統一した字母の分散

繰り返し多く使われる字母が書き換えられ、使用字母の種類が増えている例がある。

表六 繰り返し多く使われる仮名に使用された字母の用例

荷分編の「の」	真跡	荷分編の「を」	真跡	荷分編の「に」	真跡
能 あらの	乃	遠 集を	遠	尔 何故に	耳
農 おり《の	乃	越 名を	遠	仁 はるかに	仁
能 冬の日	乃	越 有事を	遠	尔 おもひやるに	尔



能	春の日	乃	遠	錦を	遠	尔	此郷に	尔
農	やよひの	乃	遠	をのが	遠	尔	世に	仁
能	空の	乃	遠	実を	遠	尔	けにや	尔
乃	柳桜の	乃				耳	風情に	尔
乃	てふ鳥の	乃				尔	あればにや	尔
能	おのが	乃				仁	有かなきかに	仁
乃	もの	乃				尔	なにゝも	尔
能	いといふの	乃				仁	大空に	尔
乃	心のはしの	乃						
能	心のはしの	乃						
能	姫ゆりの	乃						
乃	雲雀の	乃						
能	無景の	乃						
乃	道芝の	乃						
能	野の原の	乃						
乃	野の原の	乃						

※これらは、出てくる順番に記したものである。

真跡では「の」（乃）と「を」（遠）が一つの字母に統合されている。「に」はばらつきがあるが、「仁」はすべて行末に使われており、行末の強調表示に使われている。これらからも芭蕉の本文は、簡素で規則性の高い本文だといえる。

これに対し荷兮は、画数の多い、より華やかに見える仮名字母「能」「農」「越」に書き換えて表記にバリエーションをもたせている。「仁」は三例中二例が行中にあり、荷兮が草稿を単調と見なし、消書する際に華やかな紙面を作り出そうとしたことが推測できる。

## (2) 装飾文字

それぞれの本文の装飾字母を取り出し、どの部分に多く使用されているかを見ると次のようになる。

さて、構成上、この序文は、三つに分けられる。文頭から「よにかゝす」迄の部分は、これまでの経過、「けにや」から「いささか実をそこなふものもあればにや」迄の部分は荷兮のこれまでの仕事に対する評価、そして「いとゆふの」から最後までは新しい仕事への期待を述べたものである。考察の便宜上、これらを第一部、第二部、第三部とする。

芭蕉の真蹟の装飾字母は「耳」「堂」「梨」「連」。(装飾字母と判断する基準は、それぞれの序の中で、使用率が15%以下のもの、あるいは、序の中で一例で且つ、乙州本及び真跡類において使用率が15%以下のものである。)

荷兮の序の装飾字母は、「加」「起」「希」「寿」「亭」「登」「耳」「農」「日」「悲」「遍」「母」である。

これを第一部、第二部、第三部に分けて表示すると次のようになる。

表七一ア 真蹟の装飾字母

一部	耳
二部	
三部	亭 堂 梨 連

表八一イ 荷兮編『曠野』の序の装飾字母

一部	加 希 寿 耳 悲 登 母
二部	農 日
三部	起 亭 遍

芭蕉の真蹟では三部に集中しており、荷兮編ではそれが一部に集中している。言うまでもなく序文の要所は俳諧の新しい境地を述べた第三部にある。そのため芭蕉の真蹟ではそこに装飾字母が多用されている。芭蕉の表記意識がここでも見られる。一方荷兮は、自分の功績を称える第一部に多くの装飾字母を使用している。これによって、芭蕉と荷兮の用字意識の差が察せられる。その差異をさらに詳細に分析するために、表八、表九を作成した。

## 五 荷兮の書き替えの実態

表八 芭蕉真蹟で一仮名に一字母使用の仮名文字が、曠野で複数字母に替わる例

仮名	真跡懷紙	荷兮編
あ	安 6	安 1 阿 1 (あはれにや)
か	可 11	可 1 0 加 1 (か《やかす》)
き	幾 6	幾 6 起 1 (きはまりなき) 支 1 (風情につきて)
*す	寸 4	須 2 寿 1 (しらす) 寸 1 (かすかなる)
せ	世 3	世 2 勢 1 (ひとせ)
な	奈 7	奈 8 那 2 (そこなふ、はなれて)
*の	乃 20	能 1 0 乃 7 農 2 (おり《の、空のけしき》)
ひ	比 4	比 2 悲 1 (ひとせ) 日 1 (争ひ)
へ	部 2	部 1 遍 1 (みちしるへせむと)
ま	末 2	末 2 満 1 (さま《なる》)
も	毛 4	毛 6 母 1 (おもひやるに)
を	遠 6	遠 4 越 2 (名をあらのと、有事を)

※「\*す、\*の」は主要な字母が交替している。このほか、主要な字母が交替したのは、「み」である。

次は、逆のケースである。

表九 荷兮編『曠野』の序で一仮名一字母の仮名文字が真跡において複数字母に替わっているもの

文字	荷兮編	真跡
た	多 2	多 1 堂 1 (たとりて)
り	里 4	利 6 梨 1 (きはまりなき)
れ	礼 3	礼 2 連 1 (なれるへし)

表八及び表九から明らかなように、荷兮編の方が多くの字母を使用している。芭蕉の序文において一つの字母に統合されているものが、荷兮編『曠野』の序では、併用されている。真跡にはない新しい字母が多量に追加されたからである。

但し、逆の場合もある。真蹟で二種類の字母が併用され、荷兮編『曠野』の序では一つの字母に統合されたものは「たとりて」の「堂」、「きはまりなき」の「梨」、「なれるへし」の「連」である。これらは四章の(2)で見たようにすべて芭蕉のテキストの装飾文字である。偶然か故意かは、わからないが荷兮はこれらの文字に限ってわざわざシンプルな文字使いにしまったようである。しかもその修正が第三部に集中するため、第三部の装飾性が後退する結果を生み出すのである。次に漢字を含めて、一つの単語に二個以上の文字の書き換えがあるものを拾い出すと次のようになる。これらは、書き替えの意図を探るのに好都合なサンプルを提供してくれる。

表十 仮名字母の置き換え

	かゝやかす	たとり	みちしるへ	きはまりなき
真跡	可 寸	堂登利	美 部	梨 幾
荷兮	加 須	多止里	ミ 遍	里 起

表十一 漢字と字母の置き換え

	ひととせ	折《の》	あらそひ
真跡	一世	折 乃	安良曾比
曠野	悲止 勢	於里農	争 日

「かゝやかす」はより派手に、「たとり」は地味に書き替えられている。「みちしるへ」の「み」はよりシンプルに、「へ」は派手になっている。「きはまりなき」の「り」は地味に、「き」は目立つ仮名字母へと替わっている。

「ひととせ」は「悲」「勢」を使い芭蕉真蹟よりかなり派手に装飾されている。「おり《の》」の「於」と

いう仮名字母は頻繁に使用されるが、字体を見ると、ほとんど崩さず大きく記されていてかなり目立つ。「農」は使用頻度の少ない、目立つ字母である。「あらそひ」は芭蕉真蹟では一般的で簡素な字母で綴られているのに対し、荷兮編『曠野』の序では、漢字自体が目立つ上「日」という珍しい字母が用いられている。

以上、荷兮編『曠野』の序で目立つように書き替えられた単語を整理すると、「かゝやかす」「一とせ」「折く」「あらそひ」である。意味内容から考えると、「かゝやかす」を除けば、書き換えなければならないほど大切な語群とは思えない。「争ひ」などはかえって、言葉の意味を平面的にしまった。表現に齟齬をきたすために、序列をもって書き替えられたのではなさそうである。荷兮の書き癖が全くなかったとは言えないが、その可能性は少ないだろう。さきほどの分類からいえば、「かゝやかす」「一とせ」「折く」が第一部に、「あらそひ」が第二部にある。このため、これらの文字使いもまた、荷兮のこれまでの仕事を華やかに表示するための処置と見なすことができる。荷兮が第三部より、第一部を、すなわち自分のこれまでの業績の叙述を華やかに表示しようとしたことが明らかである。

逆に、芭蕉真蹟のほうが、華やかになっている単語がある。それらの単語に使用された「た」「り」は、芭蕉真蹟で二種類の字母を併用しているが、荷兮編『曠野』の序では、一つの仮名字母に統合されている。これらの文字について、真蹟類及び乙州本『笈の小文』の文字使いを参照し検討すると次のようになる。

表十二 真蹟類及び乙州本『笈の小文』の「た」堂

	N1	N2	N3	K	乙州本	合計
多	2例		5例		62例	多69例(84%)
堂		1例			3例	堂8例(10%)
太				4例	5例	太5例(6%)

「堂」は助動詞の語頭六例(たし二例、たり五例)。残りの二例は「物たらはすや」「ふきのたう」の「た」である。「たり」「たし」は、動詞の動作、作用、状態の進行、持続また動作所の願望を明確に示すのが役目である。これらの語の語頭に、目立つ仮名字母の「堂」を置くことで、「たり」「たし」の役割を強調したのではないだろうか。

次に「梨」については、以下になる。

表十一 真蹟類及び乙州本『笈の小文』の「り」梨

	N1	N2	N3	K	乙州本	合計	集中度
利		1例	1例	9例	85例	利96例(86%)	
梨	2例	2例		4例		梨8例(7%)	
里			1例		6例	里7例(7%)	

\*「梨」は動詞、名詞、形容詞、副詞に7例。

乙州本『笈の小文』には使用されていないが、懐紙、巻子に多く用いられている。これらは句が多く、また興行や逗留の記念に書き与えられることも多く、華やかな字母を必要としたものと思われる。

これらの字母は、芭蕉の用字法において、少量使われ、且つ使用法が限定されている。それ一語で意味を表す動詞、名詞、形容詞、副詞に使用され、その言葉を取り立て、意味を強調表示しようとする。また、語頭、語尾に使用されても、その語を目立たせるものもある。

この芭蕉の序文では、すでに前述したように、「いとゆるの」以降、俳諧の荒野を行く旅の精髓が述べられている。この二つの字母が使用された語「たとりて」「きへまりなき」は、共に譬喩でありあら野を旅する人の心的態度を表すものである。本来「たとりて」は「おぼつかない歩み」を表すもので、あら野の歩みの困難さを強調した語である。芭蕉のイメージの中では、俳諧の野を「たどる」旅人の姿が、強く印象づけられていたに違いない。同様に「無景の野」の果てしなさも、強く印象づける必要があったものと考えられる。

## 六 おわりに

元禄二年当時の芭蕉の字母用法の特徴は、簡便な仮名字母を集中、統一して使用し、主要字母からはずれた少数の仮名字母は文の要所を強調表示するため効果的に使われていることにある。芭蕉の『あら野』の序文でもその用字法が踏襲されている。繰り返し多く使われる字母をほぼ一つに統一し、文の要点(構成上の要所)では目立つ仮名字母を用いて読者の注意を喚起している。読む者の心を次第に高揚させ、あら野の旅心を喚起効果を意図したものである。

その様な用字意識が働いていることを荷兮は見落としている。字面の多い華やかな字母を使っているが、第一部で最も派手な文字使いになり、第三部ではではかえって地味になっている。芭蕉の表記法とは明らかに違っているのである。

編集者荷兮は、序文を大規模な集にふさわしく格調高いものに仕かったに相違ない。漢字を使うことで文体を漢文調にし、珍しい字母を多量に使う華やかな紙面を作り出した。芭蕉から届けられた序文よりも見栄え良く立派に清書したつもりであったと予想される。しかし、内容と文字使いが一体となった、芭蕉独自の洗練された字母用法が失われ、芭蕉の意図した文意を損なう序文ができあがったのも事実である。文章の要点の理解、それを読者に示唆する仕方が芭蕉とは食い違っているのである。

注一 高橋庄次『芭蕉連作詩編の研究』第二章『あら野』の樹立とその展開 昭和五十四年、笠間書院

注二 乾 裕幸『ことばの内なる芭蕉』『阿羅野』の時代 一九八〇、未來社 一三五頁

注三 岩田九郎『諸注評釈 芭蕉俳句大成』昭和四二年、明治書院 一二九頁

注四 謡曲「雲雀山」で、中將姫が姫百合に例えられている。中將姫が子方、その姫を思うあまり狂乱した乳母が 後シテとなる。地「今は御身も夏草の。茂みに交る姫百合の。知られぬ御身なり」

(謡曲大観第四巻 二六

四八頁)

注五 岩田九郎『諸注評釈 芭蕉俳句大成』昭和四二年、明治書院 一〇五三頁

注六 濱森太郎『松尾芭蕉の1200日』一九九五、三重学術出版会 一五二頁

注七 濱森太郎『泊船本『野ざらし紀行』の表記特性』(『国文学』一四一、一九九四年三月刊所収)

注八 猶みたし句文懐紙 句を同じくする、やや長文の三種類の真蹟の句文懐紙が伝わる。句は状況五年春、『笈の小文』の旅中の作。

かげろう歌仙巻子 三康図書館蔵 巻子本元禄二年美濃大垣の門人塔山等と一座した折りのもので真蹟が伝わっている。

乙州本『笈の小文』をめぐる、未定稿説、乙州編集説など様々に論議されているが、芭蕉の息のかかったテキストであることは間違いない。また、筆者は、乙州本『笈の小文』はかなり忠実に書写れていると考えるものであるが、その点に関しては別稿で論じたい。

注九 濱森太郎 文字の修辞学—『野ざらし紀行』推敲の一側面

(『三重大学日本語学』第四号 一九九三、五月刊所収)

注十 濱森太郎 『野ざらし紀行画巻』の表記特性

(『三重大学日本語学』第五号 一九九四、五月刊所収)

注十一 伊藤厚樹 天理本『野ざらし紀行』の清書意識

(『三重大学日本語学』第五号 一九九四、五月刊所収)

【本学大学院生】